

アラン、人と思想

筏 圭 司

I

アランは一八六八年三月三日、モルターニュ・オー・ペルシュに生れた。馬の産地で有名な地方である。父は獣医だった。アランはペンネームで本名はエミル・シャルチエである。彼の母は整った顔立の美人でアランは母親似だということである。父は馬に関する知識ではその地方で有名だった、読書家だったことはアランが書いている。彼は批評精神をこの父親から受けついで。小さなエミルはすばらしい食欲を持っていて、ジャム、果物、菓子、誰の手からでも受けとったという言い伝えが残っている。モルターニュの小学校では校長が言った、「どんな具合にこの子供が勉強しているのか見当がつかない、彼は何でも知っている、しかしこんなに怠ける子は見ることがない。」中学校はアランソンだった、エミルは先ず科学に興味を持った、十八の年になると文学、哲学にそれは向けられるようになった。しかし力学、物理に対する彼の好みはずっと後年まで持ち続けられた。この時代のシャルチエはいつもクラスでトップを占め、教師達に大きな期待を抱かせた非常に優秀な生徒である。

一八八六年(十八才)、パリ郊外のヴァンヴのミシュレ高等学校に転校した。ここで彼は三年間、ジュール・ラニョーの生徒だつた。ラニョーは深遠な哲学者だが殆ど書かなかつたから知られていない。シャルチエにとつてラニョーの授業は一つの啓示だった。ここではプラトンとスピノザがしばしば取りあげられた。シャルチエはアランソン時代にすでにプラトンを知り、好んでいたがここで始めてこの神的思想家が充分に説明されるのを感じた。スピノザは彼には知られていなかった、そしてこの難解な著者に導きいれるのにラニョーほど適した先生はいないだろう。ラニョーはデカルトとスピノザとの関係をはつきりと捉えていた。この二人の思想家はまるで異なった立場にいるが、それにもかかわらずスピノザによってデカルトをよく説明することが出来るのを彼は知っていた。そしてデカルトが結局正しいというのとはどの意味においてであるかをラニョーは明らかにした。彼の有名な「判断についての講義」はこの点にわたっている。もう一つの講義は「知覚」に関するものだった。ここではラニョーはプラトンにもとづきながら同時にユニークだつた。簡単な例を取ろう。骰子が六つの等しい正方形で囲まれている

立方体であることを我々は知っている。しかし、我々は同時に六つの面を見ることはない、またある時に我々が見るすべての角は決してどれが直角ではない。我々が眺める場所にに応じてこの骰子の外観はすべて異なっている。明らかにそれをどの角もが直角であるように眺めることが出来る場所はない。しかしこれらすべての外観は我々が決して見ることはない正六面体の観念がなければ一体何であるか。

この三年間がどのようなものだったかを言いつくすことは出来ない、ラニョーの影響は一生の間続くものだったからである。「私は精神と永遠の経験をもった。」一度失敗した後でシャルチェは高等師範学校に入学した。プラトン、アリストテレス、カント。卒業すると、ポンチヴィの高等学校で哲学の教授、一年後にロリアンにかわった(一八九三年)。彼はここ的高等学校で七年間教えた。この職業を彼は停年で退職するまで続けた、すぐれた教師であったことは多くの弟子と彼等の証言によって知られている。ロリアンから後にルーアンへ、そして最後にパリに一九〇三年うつたが、パリにかわるまでの時期について先ず言っておこう。

この時期に、彼は創刊されたばかりの「形而上学倫理雑誌」にかなりの論文を寄稿した。クリトンのペンネームで「エウドクストとアリストとの第一対話」、これは第六対話まで書かれた。エミル・シャルチェの署名で発表されたものは次の通りである。「ジュール・ラニョーの草稿による断片」。「ジュール・ラニョーの断片集への注解」。「記憶について」。「知恵の世俗的教説の為の材料」。「スピノザによる喜びの倫理的価値」。「自我の教育」(哲学会の為)。「知覚の問

題」。「共和国の根拠としての理性崇拜」。「触覚の知覚について」。「スピノザ」(ドラブラヌ刊)。「対象という観念」。「観念論により絶対的実証主義へ」(ルイ・ヴェーベルの本についての研究)。「アムランの命題に関する研究」。

これらの論文について彼は後に語っている、もともと彼はこういって専門的な論文を雑誌に発表するのがしように合っていたのだと。我々がよく知っている彼の数多い一般読者の為の文章はまったくの偶然から生れたものだった。ロリアンで小さな急進主義の新聞が発刊されたが資金も原稿も欠けていた、彼は援助を求められた。しかしこれは後の「プロボ」のように定期的ではなかったし、「アラン」もまだこの時代には生れなかった。我々が知っている「アランのプロボ」が始められたのは一九〇三年、彼がパリにうつた年だった。この時期の彼の寄稿は再刊されていない。彼は少しもスタイルのことを考えなかったと語っている。しかし書かれたものはいくつかは彼の氣にいった。彼は自分の発想の秘密を知りたいと思つた。そしてノートに毎日書く練習をした、これらの三冊のノートは現在「ロリアンのノート」と呼ばれて公刊されている。

II

パリにかわってからを我々は別の時期と呼ぶことが出来る。これから以後のシャルチェの生涯については、一次大戦志願を除いては、特に誌すことはない。それは意志の生涯と名づけることも出来る美しい一生だった。ここからはこの記述は年代に従わない。彼の思想の特長と思われる点を説明することにする。

彼が最もよく読んだ哲学者達はプラトン、デカルト、カント、ヘーゲルである。アリストテレス、コントは影響の点ではすくないが同じほどよく読まれた。アランの思想の中にこれらの哲学者がどのように取り入れられたかを以下に便宜的に辿ってみる。彼は後に「神々」を書いた（一九三四）。そこでは神話について充分に考えられている。プラトンは彼にとって謂わば最初の著者だったからプラトンの観念によって考える為には最も長い時間をかけたことになる。神話に関してはそうだったが、プラトンの他の諸観念を彼は殆どすべてはやくから取りいれていた。「プロポ」の中に我々はそれらを見出す。例えばプラグマチズムを批評していること、意見を真の知識と区別すること、そして技術と科学を区別すること、これらは「プロポ」に繰返し現われるテーマである。しかしプラトンについてはここではこれ以上触れない、すべての哲学者のうちでもプラトンほど思想の核心を掴んで示すのが困難なものはないだろう。アランは多くの哲学者について語っているが、その体系の核心を我々に倦まず示そうとしているのはプラトンとデカルトだけである。デカルトの懐疑についてはよく知られている。プラトンは自分のやり方を殆ど説明しない。我々の知識の中に我々が知っていることと我々が信じていることを彼は区別しようとした。このようにして信念はすべての外的な対象から清められる。信じることを知っているのは疑うことを知っている者だけであり、疑うことを知っているのは何かを確実に知っている者だけである。

プラトンとは違ってデカルトではこの教えは明瞭だ。そしてこれはデカルトの眼目でもある。ただ彼は機械論にもっと近づいて検討

した、宇宙をどのような思考も持たない場所として彼は眺める。この見方は宿命論をあらかじめ無意味にする、アランが勇氣の源を認めたのはここだった。デカルトからアランはもう一つ重要な説をひき出した、「情念論」のデカルトを人々に知らせたのは彼である。多くのプロポにおいて彼は情念という考えを明瞭なものにした。この点に関して「プロポ」と「情念論」を較べてみることは有益だろう、先ずデカルトの難解さがどこにあるかを読者はそこから察することが出来る。そして同時に「プロポ」の独特さを説明するのにこれらは適しているからだ。

カントについては、哲学を教えるにはカントに従うのが一番よいことは普通認められている。アランの「哲学概説」もその組立ての点でカントに負っている本だ。イデアの説に従って教えることは難しい。それは経験という考えのほうが我々にいつそう近く感じられるからである。この考えはカントにある通りにアランの「哲学概説」に見出されるだろう。そしてまた、「哲学概説」はカントを読む為のよい準備になることも出来る。連続の法則、因果律についての章は読者をまっすぐにカントに導く。アランはカントが始めた点、即ちヒュームのこれらの観念についての批評をまじめに取った。

次にヘーゲルに触れるのは順序だが、アランにおいては事情はこの通りではなかった。ラニョーの哲学と最も反対なのはヘーゲル主義である。ラニョーには知覚についての考察があるがヘーゲルにはない。ラニョーの弟子としてアランがヘーゲルについて正しく書いていのかどうかを言うのはヘーゲル主義者に任せよう。アランの事情と言うのは次のことだ。彼はプラトンに従っていたが、アリスト

テレスにも注意を払っていた。人はプラトンを読みそしてプラトンを愛す、しかしアリストテレスからは学ぶ。六つの「エウドクストとアリストとの対話」はアリストテレス研究の結果である。後に彼がヘーゲルに出くわした時、アランはそこに近代のアリストテレスを認めた。そして彼はヘーゲルの諸観念を発展させるよりもむしろそれらを解説している。哲学者達の観念を自分の思考の中に取り入れるのは一つのやり方である。それらの観念によって自分の考えを練習し、鍛えるのもう一つのやり方である。後者をヘーゲルに関して言うのはヘーゲルは現代の思考に最も直接の影響を及ぼした哲学者だからだ。

アランがヘーゲルを熟読したのは後年になってからである。その以前には同じような読み方で彼はオーギュスト・コントを絶えず手にした。この二人の哲学者からアランは何を学ぼうとしたのか。「偶像に対する原初の敬虔」と彼は言っている。アランにはコントの観念のいくつかがそのままに示されている。死者の崇拜はその一つだ。これらはどれも巨きな観念である。僕はここでコントの読み方について考えてみる。プラトン、デカルト、カントは我々がいつもそこにもどってゆき、そこから始めることが出来る著者である。このように始められた我々の考察はどこへ向っているのか。コントの諸観念は我々がゆくてに遠く認めるような観念だ。それはコントは堅実だからである。我々の政治的状况を明確に捉え、彼の諸考察をそこへもどすことを知っていた著者だからだ。しかし、アランが哲学を出て社会学に向ったということではない。社会学に正しい位置を認めることが問題である。社会学とは政治についての科学であ

る。コントにはさらにくみ尽くすことの出来ない偉大な観念があることを人は忘れていた。我々の考えはすべて最初は神学的だった、と彼は言う。これは諸宗教を通して歴史を明らかにする鍵だ。あるいは、世俗の権力と精神的権力の分離という考え。これらの観念は我々の状況に強い照明を投げかける。コントを熟読したアランはそれらを彼の道の曲り角にいたる所に置いている。モンテーニュが彼の散文の中に詩人達の引用をちりばめているように、アランの思想は大哲学者達の観念をその中に含んでいる。そして彼のやり方はその際に説明するよりもむしろ彼等の最も力強い、独自のものをとりだしてみせる。

III

アランの思想を紹介する為にはここでは彼の著書の主要なものにすることにしよう。本来の哲学を扱っているのは次の諸著である。「精神と情熱に関する八十一章」（後に、哲学概説）。「ジュール、ラニョーについての回想」。入門的な意図で書かれたものには、「観念」、「盲人の為の摘要」、「カント哲学についての手紙」がある。これらとは別だが重要なのは「海辺の対話」である。そこでは悟性にもとづくいくつかの考えが追求され、発展させられている。哲学をあまりじめに取ることを好まない読者でここに描かれているような悟性が氣にいる者は多いだろう。

悟性の哲学が哲学のすべてではない。ただ、悟性の役割が大きくなってきたというのは事実だ。我々にとって今では親しいものになつてくるこのものは一体何だろうか。悟性は観察によって発展させ

られる、それは経験の精神である。我々が様々な経験の間に秩序を
求めることを知るにつれて親しくなってくる方法だ。ところでこの
悟性とは一体何かと我々は尋ねる。アランの反省は空間、運動、道
具についてなされている。道具は梃子、楔、車輪などである。空
間、運動について考察するのはもっと単純だ。これらの出来るだけ
単純な実例について反省することが悟性のやり方である。道具の歴
史の中に悟性を求めるのは困難ではない、空間の知覚のうちにもす
でに悟性が現われているのを認めようとするのは哲学者の仕事だ。
この方法の特徴はいつでも単純なものから始めて複雑なものを知ろ
うとする点にある。デカルトが情念について、アランが想像力につ
いて考察したのも同じ方法に従ったわけである。

これだけを前置きにして「精神と情熱に関する八十一章」に移ろ
う。哲学が他の諸科学と区別される点がある。どの科学もそれぞれ
の対象を正確に認識するのが目的だ。事物の正しい認識は誰にとっ
てもよいものである。しかし哲学者はそれがよいという意味を情念
の療法としてみなす、なぜなら、情念の原因は事物と自己に関する
誤った認識に結局帰すことが出来るからだ。我々の持っている認識
には正しいものもあり、誤ったものもある。誤った認識とここで言
うのは、コペルニクスの体系に較べてプトレマイオスのそれが誤っ
ているといった種類のものではなく、むしろ我々自身の情念によっ
てあいまいにされた認識を指している。多くの迷信や錯覚から対象
を持たない、即ち検証するすべのない認識に至るまでである。それ
らのうちに言葉という重要な原因を挙げなければならぬ。言葉は
元来どのような組合せにも応ずるものだ、証明という形式はそれに

対する用心である。弁証法も同じ起源のものだが困難はずっと複雑
になっている。そしてこの困難は第一原因に関する昔からの有名な
議論という形で現われる。

哲学の力は確固たる判断にある。その為にはすべてを知ることよ
りは、自分が知っていることはよく知るといふほうがずっと役立
つ。だから判断そのものについての批評があるわけだ。すべての真
理が出来あがったものとして、いわば不変の形式としてしか受けい
れることが出来ない精神がある。これに反して判断とは真理を固着
させてしまわないようにする為の精神の働きだ。真理を命令によっ
てもう一度作りあげようとするのである。弱い精神にとつては幾
何学の証明は疑う余地のないものである。しかしある証明が正しい
ことを証明する証明はない。

判断についてのこの厳しい教説は哲学者達に共通している。アラ
ンはラニエーによってこのことをはやくから理解していた。しかし
アランがここから始めてどこへ着いたかを言わなければならぬ。
彼の所謂、楽天主義はここにもとづいている。我々を救うのは結
局、信仰である。しかしこの信仰は対象を持たない信仰である。対
象としての神という考えは拒否される。同じことはアランの言う勇
気についてもあてはまる。宇宙を我々を脅かしてもせず、援助をさし
のべもしない裸かの力として眺めるに至る時、我々は勇気が一番近
くにいる。アランのこのような考えは「幸福論」などによってよく
知られている。その根拠を我々が溯るならここまでするだろう。

このようなが行動というものの中心だ。次に我々は行動に密接
に結びついたものとして美德について考えなくてはなる。しかし我々は

情念について今考えなければならぬ。我々の行動を明らかにするものとしての自由意思の教説はこの哲学の最も高い点だ、ここに我々自身を置きながら情念という豊かな砂漠を横ぎろう。行動の中心には自由意思によって照らされた判断があるように、すべての情念の中には宿命論によって導びかれた判断がひそんでいる。情念を捉える為には確かに一つしか方法がないということはない。アランの考えは情念を一種の判断として、しかし宿命論がそこでは支配している判断と見ることにある。この観念を明らかにするには多くの実例と分析が必要だ、そしてアランはその為沢山書いている。ここでは宿命論に関して一つの注意をつけ加えておこう。宿命論は古人にとつては最も親しい考えだった、宿命論は全く誤っているのだからか。すでになされている事柄に関しては、それがそうでしかあり得ないと欲するのは知恵である。しかし誤りはこれを未来についても適用させることにある。この区別は容易だが、情念の中にこのニュアンスを見わけるのは有益だ。例えば行動人はこの種の宿命論を持ってゐる。しかし我々にあつて宿命論を謂はば難解なものにしてゐるのは決定論との混合だと言わなければならない。

結果の中に生じる事柄はすべて測られ、定められたものだけというものが決定論である。これは閉ざされた体系において真である。そして我々がそこで働いている原因の数を知らずにつれて真である。これが科学上の決定論であり、数学はその典型だ。もう一つ民衆的な決定論がある。海で死ぬことになつてゐる人間は量の上では死なない。某は或る日に死ぬと予言されていた、突然に名医が現われて見放されていた彼の命を救つた。だが医者が見放されたことも結

局、予め書かれていたのだ。このようにして、小は回路の中の電流の流れも大は人間の運命も、さらには太陽系の運行も同じような具合に決められ、測られてゐる。これが宿命論と結びつけられた決定論だ。しかしよく検討するならば厳密な意味での決定論は宿命論を排除することに注意しなければならない。なぜなら、原因の系列に於ける僅かな変化も結果のすべてを変えてしまうからである。以上に書いた一連の考えが情念に対するこの哲学者の観念である。アランの観念の多くが情念を鎮めることを目的としてゐるのに注意しよう。このことは哲学というものについての彼の考え方を明らかにする。

様々の徳について考える前に情念について書いたことは、哲学が倫理を目指すけれども、モラルを説くことはその仕事ではないことを示している。アランはすべての徳の最初に勇気を置いている。これは我々にとつて近づきやすい道だ。勇気が真の哲学者にふさわしい徳であること、このことはデカルトとラニョーの例によつて今や明らかである。しかしアランは人間を勇氣によつて定義するところまでゆく、この道徳には少しもあいまいさはない。節制については芸術家達において最もよく知られた徳だと言へるだろう。同じ言い方をすれば、誠実な世間人の徳だ。嘘をつくのは正しくないと言ふのは実は不正確である。所謂、モラルは多くの例外をつくることで満足しているが、こういつた世俗的な考えもやはり道理を持つてゐるのだ。例外を認める側のほうが弱い、そしてここでは譲歩してゐるのはモラルである。誠実という考えは、スタンダーが言うように、まじめに考えられたことはなかったというのが事実だ。

正義についてアランが書いてゐる章は最も堂々たるものである。

この急ぎがちの註解はそこに余計な言葉をつけ加えないようにしなければならぬ。むしろ、同じ問題についてのアランのもっとよく知られた観念を書いておこう。彼はまっすぐな精神と正しい精神とを区別する。自分がよく知っている観念をあくまで保持しようとする、これは立派なことだ。しかし正しい精神とここで呼ぶものはそれではない。彼は人間に個有の誤ちの知識によって人間性を捉えている。正しい精神という言葉は普通に使われるが、その意味はここにある。まっすぐな精神とは事物だけによって養われた精神だ。正義に関するあらゆる探求は彼にとつては無意味である。しかし厳密に言つてこのような精神はあり得ないから、労働者にとつて正義に関する思索は一つの試練であるという現代の状況が説明される。

「哲学概説」は「儀式」の巻で終つてゐる。その各々の章について解説するのは必要ではない、アラン自身がそれぞれに充分な発展を後に与えたからだ。とりわけ、「芸術論集」、「神々」にはアランの思想の最も力のかもつた適用が見られる。僕はここでもただ、儀式という観念を説明するにとどめよう。これは誰でも知っているにもかかわらずあまり考えられることのない観念だ。上に挙げたアランの二つの主要作にもこの観念は見出される。例えば、儀式そのものではないが、儀式的なものという観念は芸術作品のすべてを規制している。そして宗教に関して言えば、儀式は宗教のほとんどすべてである。しかし、「哲学概説」の最終の部分に照らす観念として、はこれらの場合と違つて説明が必要だろう。多分、この部分には、社会、或いは政治という題名も同じように予想されることが出来る。扱われるのは同じものだ。我々の考察の最後の対象を政治と呼

ぶのは適當だろうか。多くの人は政治をあまりに高く置きすぎている。本来の意味での政治は、地理、氣候、人種などの諸問題に還元されることの出来るものだ。ユントが始めた社会学は確かにもっと我々の考察に近い。それは一つの科学である。例えばここでは社会を構成している単位は家族であり、家族は生物学の法則に従つて研究されている。これらの二つの方向はどれも我々の現在の対象によく準備させることが出来る。しかしこれですべてが言われたらどうか。アランの考えは次の通りだ。社会という考えはいつでもあつた、そして昔に溯るほどその力は人々に強く感じられていた。社会という名前は新しいものだが、この公けの力を表現するには儀式という言葉のほうが判り易い。これは我々を一つの観念に導く、つまり、社会を思考の場と見做すということだ。「最も輝かしい考えも社会の決してとぎれることのない織目の上に生きてゐる」。

野蠻人にとつては社会は神だつた、このようにしてイフィゲニアの犠牲は大きな儀式とは音楽會が、劇場が表わしているようなものである。一方から他方までへの大きな距離は歴史によつてよりも観念によつていつそよくはかられる。僕がここで儀式と呼んでいるものはもちろん一つの言い方にすぎない。僕はそれによつてアランの思想が向つた方向を示そうと思ふのだ。アランの主著は「神々」である。これは宗教論ではない。この点については次の事実によつて察せられるだろう。「神々」におけるアランの方法に慣れていない読者は「芸術論集」によつてそれに準備させられることは出来る。この二著は主題が異なつてゐるが読者はそこに共通した考え方を認めるに違ひない、僕の意見ではそれがアランに独特のものだ。しか

しこまで来れば観念とそのすべての発展について読者を著作自身に送らねばならない。幸いにこの二つの著作はそれぞれに解説を持つている。「神々」に対しては「神話入門」、「芸術論集」には「芸術二十講」がそれだ。主著に並行して同じ順序で、しかしそれほど緊密でなく書かれている。

アランには他にも有名な著作がある、僕がここで挙げたものよりもそれらのほうを好む読者もいるに違いない。そして僕は「プロポ」には触れる余裕がなかった。これらの四頁ばかりの短い感想の中に一人の考える人を認め得る読者は確かにアランを知っているのだ。しかし、僕はこの簡単な素描を今は閉ぢなければならぬ。彼は哲学者だった、そして力強い思想家だった、力強い思想家、それはただ人間ということを意味する。彼は服従は市民の美德であると敢えて言いきった、しかし同時に精神の為にはどのような服従をも拒否した。彼は機械的なものの中には思考を認めなかった。彼ががっかりしたと呼ぶのががっかりした農夫のような思想である。動物は考えないとデカルトは言った。アランは機械は考えないと言う。これらの判断が「プロポ」だ。我々が生きている現代が突然、哲学者の光線で照らされる。そして、いつの時代でも人々を捕えてまた問題もある。世界と人間を知ること。それは素朴な人達と哲学者とに比べては永遠に新しい問題だ。ただ、哲学者は先ず世界を知ってそれから人間のところに帰ってきたという顔つきをしている。

「自然という主題はもっとしっかりしていた。それはすべての私の考えの背景だ。人は自分を先ず最初に知ると言うことが私にはどうしても判らなかつたと私はさきに言った。主観的に考える人達の

状態とは私が察す限りでは、夢の中に閉じ込められ、世界からきり離されて窓のない存在を發展させていると見えた。ほぼライプニッツの单子のようだが、しかしここには窓の気配もあれば外には一種の世界もある。全体は我々が夢を見ている時のように内に向い孤独だ。これらの支えきれない創作物を厳密に分析することは教授された。或いは秘伝的な学説にぞくしている。しかし決然と外に向って生き、考えるにはこれらの迫るのにかなり困難な理由を提出する必要はない、それは最も自然なことだ！この点については私の読者のうちでも一番無学な者が私と共に歩くのに一番適している。彼等は、私同様、世界の堅固さが少しでも疑われていたら、本を閉じてしまったらう。そして私は自分が描写する時にはこの世界をすべての人間の灰汁から清め、それを我々が居ない時のように見ようとすることをただだけだと信じている。そして先ず克服されなければならなかつた最初の幻覚は地平線というものだった。これは事実、私にとって近いものという以外ではない。そして私自身が他の人間にとつては地平線に居るのだ。大変簡単なこの観念は大きな結果を持つている。なぜなら我々は先ず未知の事物は別のものであり新しいと信じている。我々がそれらを遠くから、推測で考えている限りはこのように信じる。旅行すると人は反対に宇宙は到るところ同じものだと知るようになる。しかし、世界と魂を分離するならばこのことをもっとよく知る。我々が間違つて世界にぞくしていると判断しているもの、そして我々のものであるにすぎないものを仮に魂と呼んでおく。最も賢い人達が世界を謂わば眼鏡なしで見えるようになってから久しい。」(わが思索のあと)